「茶旅」
“こぼればなし“

(12) 広西の六堡茶と富山のバタバタ茶

コラムニスト　須賀　努

もう2年以上前になるが、香港からバスで7時間以上かけて、中国の広西壮族自治区蒼梧県に行ったことがある。そこは六堡茶という黒茶を生産しており、その歴史は意外と古く、清朝時代に既に全盛期を迎えていたが、近年生産は低迷していた。と同時に中国国内での消費は殆どなくなり、香港やマレーシアに輸出される茶となり、一般的には殆ど見かけない幻の茶となっていた。

ところがここ数年、プーアール茶の売り上げ急増を背景に、同じ黒茶ということで、町おこしの一環として、六堡茶が売り出され、注目され始めた。六堡茶の産地では、改革開放期の80年代に茶工場が廃業に追い込まれ、樹齢100年を超える茶樹もかなり切られてしまった。日本へも健康茶として輸出されていたが、それも途絶えてしまったらしい。今は民間企業が運営に乗り出し、六堡茶廠も新たに復活している。可愛らしい容れ物の籠は日本女性にも人気が高まっており、また数十年を経た老茶は既に骨董の一部として扱われている。40年物と言われた六堡茶を飲んでみたが、味が実にマイルドで飲み易く、健康にもよい、ということで、中国にも愛好家が増えている。

それにしてもなぜマレーシアで六堡茶が飲まれているのかが疑問だったのでクアラルンプールにも行ってみた。チャイナタウンのお茶屋さんへ行くと、確かに六堡茶が沢山並んでおり、華人を中心にかなり売れていると言われた。華人に聞いてみると『高温多湿の東南アジアでは、免疫力を高める、解毒作用があるなどの理由で飲んでいる』との話があった。実際この地で飲む六堡茶はスッキリとした味があり、何杯でも飲めてしまう。

100年以上も前に、海を渡ってきた福建や広東出身中国人は、この地で過酷な炭坑労働などに従事した。暑さと湿気は彼らを悩ませ、熱帯でのマラリアなど病原菌にも対応するため、このようなお茶が飲まれ始めたという。固形の後発酵茶は、ある意味で薬として珍重されていたようだ。

近年六堡茶に関する本も出版されているが、梧州で購入したその本には、何と『茶の製造方法が富山県朝日町のバタバタ茶と類似している』と紹介されていた。当時バタバタ茶を知らなかった筆者は、富山県にも行ってみた。バタバタ茶は元々仏事の一環として、各家庭でお客を招いて飲まれていたが、500年にも渡る伝統的行事として、今では町が伝承館を建てて保存していた。

バタバタ茶は茶釜などで煮だした黒茶の汁を五郎八茶碗に入れ、二本合せの茶筅をかなり激しく振り、泡立てて飲む。以前は塩を入れて飲んだというが、老人たちは『高血圧で止められている』と言って、塩を振る姿はなかったが、茶に塩を入れるのは、陸羽の茶経にも書かれている伝統的な飲み方であり、その歴史が知りたくなる。

六堡鎮に残っていた100年茶樹

しかしこの茶葉、朝日町で作られ始めたのは最近のこと。以前は福井県で生産されたものも購入していたが、その生産農家が辞めるということで、朝日町に茶園を作り、後発酵茶を年1回、7月頃に製造しているという。ただこの茶作りは簡単ではなく、試行錯誤の連続だと担当者は話していた。このお茶は中国から渡ってきたのだろうが、どのようなルート、どのような経緯があったのだろうか、実に興味深い。

興味深いといえば、バタバタ茶の伝統を残す蛭谷という集落。地元では『ビルダン』とも『ベルダン』とも聞こえる特殊な読み方をしている。筆者は瞬時に、沖縄の読谷村が『ヨミタン』と読むことを思い出し、この関係を尋ねたが、全く考えもしなかったという返事だった。茶は一向宗などが仏事に活用したのだろうが、その由来は遥か波の向こうにあるような気がしてならない。

因みに沖縄にも行き、読谷村の歴史資料館で『なぜヨミタンと読むのか』と質問したところ、絶句されてしまい、回答は得られなかった。更には読谷のすぐ近くには谷茶ビーチという海岸があり、これを『タンチャ』と呼んでいることも発見したが、その由来にも今現在辿り着いていない。

そもそも中国で茶の起源に大きく関係しているのは少数民族のヤオ族であるが、六堡鎮付近にもヤオ族が住んでいたという。そのヤオの一部は移動を繰り返し、福建・広東の沿岸部に到達、そして一部が海を渡ったのだろうか？沖縄のブクブク茶との関係は？筆者の妄想は1つの茶からどんどん広がっていくが、今のところそれを検証するような材料は見つかっていない。

（すが　つとむ）